Art in Hospital

患者と医療従事者に優しい病院環境をつくる

東京における高齢者医療の要

⑩ 東京都健康長寿医療センター（東京都板橋区）

地下2階、地上12階建て。病床は550床を備える

公園と見間違うほどの豊かな緑に囲まれ、桜並木の散策路も整備された敷地。「ホスピタルパーク」と称し、患者だけでなく、地域住民の憩いの場にもなっている。その一角に、「日本資本主義の父」と呼ばれるとともに社会事業家でもあった渋沢栄一の銅像がある。東京都健康長寿医療センターの源流は142年前に創設された養育院にまでたどれるが、渋沢は事務長や院長として養育院に58年間も関わった。養育院から精神病、ハンセン病、児童福祉、高齢者福祉などの専門施設が発展しており、日本の医療・福祉の原点ともいえる。

同センターは2009年、都老人医療センターと都老人総合研究所が合併し、新たに地方独立行政法人として発足。13年に新施設を開院した。高齢者に特化した高度専門医療病院として心血管病、がん、認知症、救急医療の四つを重点医療に掲げている。

併設の研究所が老化、高齢者の疾患の機序、高齢者の福祉や健康増進に関する研究に取り組んでおり、最新の研究成果がいち早く臨床に還元されるのが、同センターならではの特徴だ。

最新機器の導入はもちろん、ユニバーサルデザインにも配慮。総合案内の他に設けた六つのブロック受付は分かりやすいように円形にした。病棟では、認知症患者が多いため、ナースステーションは患者の出入りを管理しやすいよう配置。車椅子での移動やトイレ使用がしやすいように病床、トイレのスペースを広めに確保した。

「団塊の世代の高齢化に対応するため、個室率を9％から39％に上げ、プライバシーにも配慮しました」と井藤英喜センター長。

日本の病院では初めて、新施設の計画段階からアート選考委員会を組織した。「生命とこころ」をコンセプトに、全フロア、全病室にアートを配置し、屋上庭園も設け、患者や家族の心を和らげる工夫もしている。

都は12の病院を認知症疾患医療センターに指定しているが、都健康長寿医療センターはそのまとめ役を担う。井藤センター長は「都全体の認知症医療・介護体制を築く役割をしっかりと果たしていきたい」と語る。また、同センターは患者の在宅復帰を支援するため、地域連携、病病連携、病診連携も推進しており、高齢化が進む東京における地域医療の要としても期待されている。

吹き抜けの天窓から明るい光が差し込むエントランスホール。ブロック受付は円形とユニーク

展示や図書をそろえ、くつろぎの空間にもなっている養育院・渋沢記念コーナー

フロア各所に配置されたアート。案内板の文字も大きくて見やすい

高級感あふれる有料個室。細かな部分に気配りがなされている

小路に傾斜を付け、リハビリにも一役買っている屋上庭園

地域住民や来院者が散歩や読書を楽しむ散策路